■研究論文

「集団的思考と危機Ⅱ
―1930 年代の中井正一と分裂するディアロゴス―」

門部　昌志

Collective thought and crisis: Masakazu NAKAI in 1930's and splitting dialogos
Masashi MOMBE

抄録/概要/要旨　本稿は、一九三〇年代半ばまでの中井正一の軌跡を機能概念を中心として再構成した「集団的思考と危機Ⅰ」の続編である。「委員会の論理」（一九三六年）において、機能の論理は限定的に批判されるようになる。機能概念は、技術論の領域に寄与するが、専門家と大衆の乖離をももたらすとされる。機能概念は、骨組みに過ぎず、技術の論理によって目的ないし方向を与えられる。「委員会の論理」において、討論、思惟、技術、生産について説明したのち、中井は、商品化と専門化の問題を扱う。まず概念が商品的性格を帯びることで、人間的目的の方向にそっての批判を欠いた「無批判性」の性格をもつことが指摘される。次に、分業化ないし専門化によって生じる問題としては、協同的統一性からの遊離としての「非協同性」の現象が指摘される。これら無批判性と無協同性から概念を救済する方策として提案されるのが実践の論理である。実践の論理は、審議性と代表性からなっている。審議性は、提案から質問、説明、討議、そして決議に到達する。代表性は委任と実行からなっている。審議性より代表性へと転化する過程は計画と呼ばれる。計画は実行を経ることにより報告となる。提案、決議、委任、実行、そして報告と批判を経て新たな提案に回帰する委員会の図式は、実行を媒介とした転化の過程である。それは、自己関係的な否定によって発展し分裂する〈過程〉である。提案、決議、委任、実行という、中井の提示した手続に対しては、それ自体が提案であると位置づけられ、この「図式が自ら他のものに換はることに又**実践の論理**の重大な意味がある」と述べられた。

キーワード：　機能、危機、主体性

四　「委員会の論理」

「思想的危機」という言葉は、「委員会の論理――一つの草稿として――」において、もはや中心的な主題ではない。だが、かつて「思想的危機」として中井の提示した問題は、商品化や分業的専門化など、別の言葉で論じられており、実践の論理を要請する重要な前提となっている。思想的危機の問題と集団的思考のモデルは、実質的には、危機論文から「委員会の論理」に継承されているのである。ただし、「委員会の論理」には、機能概念の批判が見られる。中井の集団概念が機能概念を前提とするものであった以上、機能概念に対する評価の変化は、集団概念と無関係ではないはずである[1]。

「委員会の論理」には、社会的コンテクストから機能概念を照射する試みが見られる。それはあくまでも限定的な機能概念の批判であり、機能論は技術論のなかで援用されている。以下では、「委員会の論理」における、機能概念の位置づけの変化を検討することにしたい。ただし、上、中、下の三篇からなる「委員会の論理」は、約一〇年間に中井が執筆した論考の主題を盛りこみ、発展させた論文である。すべての論点を網羅することは困難である。本稿では、機能概念と思想的危機、集団的思考など、これまでに確認した問題に照準を合わせて「委員会の論理」を考察する。

機能概念への限定的批判

上篇（一節―五節）で提示されるのは、各文化段階における論理の歴史にかかわる図式である。論文の筆頭、中井は論理の概念規定が曖昧であると問題を提起する。彼によれば、文化の推移において論理やその現象型態は様々な「役割」を果たしている。にもかかわらず、変化する現象を超越した「特別な世界を構成」するものとして論理が扱われることにより、論理という言葉が一様になっているというのである。「超越的な永遠の世界」を論理が支配するという考え方とは異なり、中井は、様々な時代における論理の現象型態、すなわち古代文化[2]、中世文化、近代文化における「言はれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」について論じる。これらの論理の図式を説明する際、社会制度のみならず、

[1]馬場修一「大衆化の論理と集団的主体性―戸坂潤・中井正一・三木清の場合―」、江藤・鶴見・山本編『講座コミュニケーション６　コミュニケーションの典型』（研究社、一九七三年）、一五四―一五七頁参照。馬場によれば、中井の集団概念は、当初、機能概念として規定されていたが、「委員会の論理」ではその限界が示されるようになり、中井は最後に「ヘーゲルの主体性概念」に注目したという。

[2]中篇の冒頭で中井は「古典文化」という言葉を用いたが、下篇の冒頭では「古代文化」に変更している。

言語活動や言語媒体が考慮されていたことは、「委員会の論理」の特色であるといえる。

上篇の四において、中井は、一九世紀後半から二〇世紀初頭の論理学書における「論理の数学化」について指摘している。中井によれば、当時の論理学書には、数学をモデルとした論理形成の傾向が見いだせる。その背景は、論理には変化する現象を離れた「永遠の世界」があるという考え方である。中井は、論理の数学化の傾向を、「論理の函数化」と呼んでいる（その傾向を示す論理学書として中井はカッシーラーの著作にも言及した）。論理学における函数化の傾向性を指摘した後、中井は、その問題点と時代背景について概ね次のように述べている。

資本主義が「帝国主義的段階」に達し、第一次世界大戦へと向かう時代、重工業的生産機構によって生産物と人間が変貌する。概念の世界では、「論理の函数化」が進行しており、論理は「記憶的表象の総合」から「函数的エレメントの複合構造」に転化する。この段階において「論理の一般大衆からの分離」が生じる。論理学の方法は専門的なものとなり、高度な方法と[3]、より「一般的な三段論法」に分かれ始める。また、科学技術の作りだす物の概念の決定においても、専門的技術家が函数概念によって思考する一方、大衆は実体概念的思考にとどまる。この指摘で注目すべき点は、第一に、危機論文の逆説的な〈大衆化〉の観念――専門化過程の徹底化によって専門家は相互に俗衆になる――とは対照的に、専門家と大衆の乖離が強調されていることである。注視すべき第二の点は、専門化のもたらした問題を考察する際、機能の論理とその帰結が俎上に載せられたことである。「委員会の論理」では、機能概念によって技術が論じられるだけでなく、社会的コンテクストとの関連から機能概念それ自体が検討の対象となっているのである。この意味で、「委員会の論理」は機能概念の相対化に通じる記述を含む。三〇年代初頭の論考で、中井が機能概念を導入し、美学や芸術の問題に応用したことを想起するなら、これは顕著な変化と考えられる。

危機の時代と媒介としての論理

上篇では、「言はれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」の各々は、社会制度との関連で論じられていた。そこに見いだせるのは、社会制度が論理を規定するのみならず、論理としての観念が、社会制度の転換する時代に一定の「役割」を演じるという見方である。中篇の冒頭（第六節）において中井は、「前号を見ざる人」の便宜をはかって、上篇を要約している[4]。それによれば、論理は「一つの制度の崩壊とその他のものによる再編制とによる危機に於いて、何等かの特有な役割を演じてゐる」[5]。つまり、制度が新たなものに転換する危機の時代において、論理はその媒介になるのである。経済決定論とは異なり、中井は、社会制度の転換において論理が媒介的役割を果たすことに注目している。その際、合理性それ自体もまた、やがては「他のものに転換」され、次の時代の新たな合理性のなかに保持されると考えられている。各時代の論理は、別のものにとってかわられるのではなく、対立物に転化しつつ、保存されるというのである。そして様々な合理性が、累積と再編制をへて、委員会の論理を構成する。

歴史的回顧のなかで中井は、論理が果たす「役割」に注目している（この「役割」という言葉は、一般的には、「機能」の説明で用いられる言葉である）。彼は、各時代における様々な論理を、その「役割」を注視しながら、古代から近代へと辿り、やがて同時代の論理を検討するに至る。その考察が「機能の論理」それ自体を対象化する時、「論理の一般大衆からの分離」という事態が見いだされる。機能の論理に対する批判が、論理の機能の検討によって導きだされたかのように。ただし、中井は、「機能」と「役割」という言葉を使い分けている。「委員会の論理」で中井は、「機能」の論理を論理の数学化に関連づける一方、論理の「役割」という言葉を社会的文脈で用いる。「論理は常に一つの制度の崩壊とその他のものによる再編制とによる危機に於いて、何等かの特有な役割を演じてゐる」[6]。「役割」という言葉は、安定した社会秩序が成立している状況ではなく、制度が崩壊し再編成される危機的状況に関連して用いられている。中井における危機の注目は、日常性の論理化に寄与することはなかったかもしれない。しかし、それは秩序の変容を論じることを可能にしている。

技術の論理

中篇の冒頭で媒介としての論理が説明されたのち、議論は歴史的文脈から離れる。「言はれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」は、討論、思惟、技術、生産という言葉に換言され、抽象的な議論が展開される。以下では、機能概念と技術の論理を確認したい。第九節で中井は、実体概念から機能概念への展開を要約的に説明する。その際、中井は、実体概念の抽象性を「類概念」の問題としている。「委員会の論理」では、機能概念論と疎外論が共存しているが[7]、機能概念の説明において中井は、疎外論の一前提である類概

[3]文脈は異なるが、「委員会の論理」（下）で言及される「判断の記号式化」も含まれるように思われる。

[4]正確には、単なる要約ではない。上篇末尾で提示した図式と比較した場合、論理と文化、論理と社会制度の関係がより強調されており、また、媒介としての論理について、新たな説明が加えられている。

[5]中井正一「委員会の論理（中）―― 一つの草稿として ――」『世界文化』第一四号（一九三六年二月号）、一六頁。媒介としての論理については、竹内成明『闊達な愚者　相互性のなかの主体』（れんが書房新社、一九八〇年）を参照。

[6] 中井前掲論文、一六頁。

[7]『美・批評』版「機能概念の美学への寄与」に「疎外性」という

念の問題点を暗に指摘したかのようである[8]。留意すべき点は、実体概念の抽象性を克服すると考えられた機能概念について、中井が「再び抽象化の中に転化した」と批判したことである。しかし、中井は、機能概念が技術の論理に寄与することも指摘している。

中井は、機能概念を応用し、道具や技術を論じる[9]。機能概念においては、第一に、諸要素を比較する前提として、観察点が必要である。この観察点によって諸要素を含む系列が定まる。各要素は機能であり、相互規定的な関係にある。第二に、人間の住むという目的活動を観察点とする場合、道具の秩序的系列が定まり、家屋における「照明、通風、展望度」という三要素の複合体が窓の機能概念となる。中井は、技術領域の発展をも考慮している。壁全体が硬質ガラスで構成されるようになると、ガラスは窓であると同時に支柱としての壁となり、通風は建築全体に任される。「壁と柱と窓は一つの機能の中に結合されて來る」。中井の議論は、日々更新される、技術的道具の流動性に対応するものである。第三に、中井において、技術は、二つの観察点による系列形を結合するものとして、自然系列を人間的系列に転換する媒介として考えられている。水の落下という自然系列が複雑な過程をへて電気機械の運動に転化されるように、媒介としての技術によって、自然系列的要素は人間的系列的秩序に結合される。

中井は、技術が論理に及ぼす影響をも考察する。かつて航行する風船は、論理学書で虚偽概念の例証として用いられたが、ツェッペリンの飛行船は現実となった。技術は「**非現実の概念を現実の概念**に転換する」。自然の論理が、可能と不可能、偶然と必然、現実と非現実の対立を前提とするのに対し、「技術の論理は相互転換的であり、交流的である」[10]。「機能概念の美学への寄与」では、機能概念によって現実と仮象の並列的な対立が批判されていた。「委員会の論理」では、現実と非現実の、技術による転換が論じられるのである。

中井において、機能の論理と技術の論理は相補的なものである。一方で、機能概念は技術概念の領域に寄与する。他方において、技術の論理は、骨組みに過ぎない機能概念に目的ないし方向を与える強みをもつ。ただし、この技術概念にも限界がある。技術は非現実と現実の相互転換をもたらすが、**再生産**の過程において[11]、人間的目的性が拡大され、他のものに転化する可能性がある。この過程における合理性を解明するのが**生産の論理**である。

桎梏としての委員会

討論、思惟、技術、生産について説明した後、中井は、かつて「思想的危機」と呼んでいた問題、すなわち商品化と専門化の問題に立ち戻る。ただし、「委員会の論理」で論じられるのは、芸術の危機ではない。生産された商品ないし物の概念と、学問における商品化と専門化の問題が検討されることになる。

まず、存在の生産が商品性をもつことが概念に及ぼす影響について検討しよう。中井によれば、機能に適合しない物を買わないことは、それを実存在の領域から排除することである。物価の決定や生産会社の株価の上下といった現象は、「具体的な生産物としてのセメントの概念」を左右する。セメントの機能構成は、多数の人間による実験や科学的な解明においてテストされ、それが生産物の機能に対する人間的目的的価値による批判となる[12]。しかし、独占資本の段階において、大衆は、生産物の表象をもつだけで、概念を構成することはできない。会社専属の技術委員会に属さない者にとって、セメントは「**灰白色の粉末**」といったイメージを喚起するばかりである。会社専属の技術委員会では、秘密委員会となる場合もあり、商品的性格における無批判性と大衆からの脱離が生じうる。

大工業的企業の一部署である技術委員会に対し、ギルド的手工業的機構の性格を保持するのが研究的委員会である。その自由競争性によって学問研究における縄張り根性が生み出され、また協同的統一性からの遊離としての非協同性という現象が生じる。そもそも分業化の前提は組織的協同性であったにもかかわらず、次第にこの関連が脱落し、分業的専門化が突出するのである。つまり、商品化と概念の関連については、概念が商品的性格を帯びることで、人間的目的の方向にそっての批判を欠いた「**無批判性**」の性格をもつこ

言葉がみられるが、疎外論の本格的導入とは思われない。なお、疎外論と物象化論については下記を参照。杉原四郎、山之内靖、廣松渉、城塚登、水田洋「シンポジウム　社会思想史上のマルクス」、『季刊　社会思想』第二巻第一号（一九七二年五月）、二九―三六頁。

8「機能概念の美学への寄与」にも、中井が「類」という語を用いた箇所がある。

9「委員会の論理」における技術の概念については、次の文献を参照。嶋啓『技術論論争』（ミネルヴァ書房、一九七七年）。なお、村田純一『技術の哲学』（岩波書店、二〇〇九年）では、西田、三木、戸坂の技術哲学が論じられている。

10中井正一「委員会の論理（中）―― 一つの草稿として ――」『世界文化』第一四号（一九三六年二月号）、三一頁。

11 「委員会の論理」下篇では再生産と欲望が言及される（十一節）。労働力の生産は個々人の再生産である。衣食住への欲望は風土にしたがって異なり、「欲望の範囲ならびに充足様式はそれ自身歴史となり、その文化段階を形成する」。再生産の過程において、目的性は拡大され、転換され、ついには「自己疎外的な様相」をもつようになるという。

12杉山光信によれば、中井の機能概念は、民衆の日常的な実践において形成される（機能概念のこのような特徴は、実体＝本質の定義が、「ある特定の立場」からなされることと対照をなす。「中井が理論活動を進めていた時期に、実体概念は『人種という意味での民族的同一性』をはじめとし、さまざまな政治プログラムを基礎づけるものとなっていた」）。杉山は、売買や使用といった大衆の実践のうちで商品の機能が実験される側面に光をあてる一方、中井がみた機能＝使用価値のテストは価値実現の前提にすぎないと批判する。独占段階では、機能概念が大衆の実践的批判によって構成される機会は失われており、そうした状態から概念の一般性を取り戻すものとして「委員会の論理」が構想されているという。杉山光信、「中井正一試論―その言語・映画の理論と弁証法の問題について―」『東京大学新聞研究所紀要』第二三号（一九七五年）、八二―九〇頁。

とが指摘される。そして分業化、あるいは知的技術の分野における専門化によって生じる問題としては、協同的統一性からの遊離としての「**非協同性**」の現象が指摘される。

「思想的危機に於ける芸術並にその動向」で中井は、商品化、専門化、大衆化との関連から思想と芸術の危機を描き出した。「委員会の論理」では、利潤機構に加えて「帝国主義」という言葉が用いられるようになり、思想と芸術の領域から概念の領域へと焦点が移行している。それは生産物の概念であり、また、知の領域における概念でもある。すでに「機能概念の美学への寄与」において、中井は、実体概念にかわる機能概念を論じていた。「委員会の論理」においては、概念の商品的性格に由来する無批判性や、専門化の結果として生じた無協同性が注目される。そこでは、機能概念を論じるのみならず、社会との関連から概念が論じられている。危機論文では「よりよき組織を希望する」ために思想的危機の分析がなされ、論文の末尾では、集団主義機構が利潤機構を脱落する可能性が示唆されていた。「委員会の論理」では、さらに、無批判性と無協同性から概念を救済する方策として**実践の論理**が提案されることとなる[13]。

集団的思考における危機

実践の論理は、審議性と代表性からなっている。審議性は、**大衆的潜勢力**、およびその基礎である現実的地盤を反映した提案を出発点とするものであり、この提案は正射影を前提とする。提案から質問、説明、討議、そして決議に到達する。決議が得られると、個人や部署、組織への委任がなされ、実行に移される。代表性は委任と実行からなっている。実践の論理がもつ特徴は、それが回帰的だということである。提案と審議から委任と実行へと至る過程、あるいは審議性より代表性へと転化する過程は計画と呼ばれる。一つの設計図（Entwurf）としての**計画**は実行を経ることにより、「結果としての**投影図**」（Geworfenes）、すなわち**報告**となる。**実行**という切断を介して計画は報告に転化するのである。この後、計画と報告のずれが生じるが、それは、現実的地盤からの再検討によって是正され、「より高次な**計画**」に転化する。

実践の論理をめぐる記述には、様々な論点が見いだせる。第一に、思想的危機に関する論文との異同がある。一方では、「委員会の論理」における実践の論理には、投企（Entwurf）と被投 （Geworfen）という危機論文の図式が反響している。危機論文では、個人における被投と投企の機能として「記憶」と「構想」が想定され、集団における被投と投企としては、「記録」と「企画」が想定されていた。「委員会の論理」において、投企と被投は、「設計図 Entwurf」と「投影図 Geworfenes」に換言されつつ継承されているのである。他方、危機論文では、投企と被投の関係が並列的に記述されていたのに対して、「委員会の論理」では「転化」が強調されている[14]。設計図としての計画は、実行という切断をへて投影図としての報告に転化し、報告と計画とのずれによって新たな計画が産み出される。提案、決議、委任、実行、そして報告と批判を経て新たな提案に回帰する委員会の図式は、実行を媒介とした転化の過程である。それは形式体系の内部で自己完結するものではない。

第二に、提案、計画、報告、批判からなる回帰的過程が論じられる際、主体性が言及されることに注目したい。

> そしてこの**実践**の論理は現実的情勢の反映として、換言すれば主体的条件の客体化として、先づ**提案**があり、更に**計画**と**報告**、その現実的地盤よりの**批判**、この四つの契機を経て、再び提案へと回帰する。この主体的条件より主体的条件への回帰による深化、ここに真の**主体性**の意味があるのでもあり、自からを媒介へと転化する弁証性もあるのである。
>
> この**主体性**の中にある自らの分裂、そこに過程として、歴史として、進展の意味があり、常に二つに分裂する**デイア・ロゴス**の意味もあるのではあるまいか[15]。

ここで中井は、提案から新たな提案に回帰する過程について説明しながら、次第に、主体性に関する説明に移行している。かつて馬場修一は、「委員会の論理」に見られる主体性の概念が、「Subjekt の問題」で提示された実践的主体性の概念を組織のレヴェルにおきかえたものであると指摘した[16]。「Subjekt の問題」で中井は、その語源を含め、Subjekt の様々な意味を歴史的に整理している。その一つが実践的主体性の概念であった[17]。

> 主体性とは、実体性に対立することに於てその明瞭な姿をあらはす。〔……〕弁証法的主体性では、自ら否定を媒介として、対立契機の中に、常に自らを規定しつゝ発展する過程 Process である。常に自らの崩壊と再建に臨んでゐる無限な危機的契機である。こゝでは、一つの基体は常に二つに分裂して、妥協することなく、連続するこ

---

[13]概念の商品性から生み出された無批判性に対しては、思惟と討論の総合としての審議性を確保しなければならない。概念の専門化によって生起した無協同性に対しては、技術と生産の総合としての代表性が必要となる。思惟―討論の論理と技術―生産の論理の結合により、換言すれば審議性と代表性の実践性によって成立するのが**実践の論理**である。

[14] 多田道太郎は「委員会の論理」の原型を危機論文に見出していた（桑原武夫編『日本の名著　近代の思想』中公新書、1962 年、194 頁）。本稿に於ける、転化が強調されている点についての指摘は新しいものと思われる。

[15]中井正一「委員会の論理（下）―― 一つの草稿として ――」『世界文化』第一五号（一九三六年三月）、二五頁。

[16]馬場前掲論文、一五六頁。七三年のこの論考で、馬場修一は、すでに弁証法的主体性における危機的契機に言及していたが、集団的討議における分裂や危機は強調されていなかった。

[17]この他、基体的主体性、観測的主体性、血的主体性が言及されている。

となく、その対立の媒介に於て自らを規定するところの、安らふ場所なき発展と緊張である。否定を媒介とするところの党派的契機がこの主体性の何うしても忘れることの出来ぬ自己規定でなければならぬ。これを実践的主体性と名づけたいと思ふ[18]。

留意すべき点は、中井における実践的主体性が、関係以前の〈実体〉ではなく、「実体性に対立する」ものと考えられていることである。また、「委員会の論理」と「Subjekt の問題」における記述の相違も注目に値する。「Subjekt の問題」において、実践的主体性とは、自己関係的な否定によって発展し分裂する〈過程〉であり、「常に自らの崩壊と再建に臨んでゐる無限な危機的契機」を孕むものとされる。これに対し、「委員会の論理」の末尾で主体性が論じられる際、「危機」という語は用いられていない。中井にとって、委員会は危機的契機とは無縁のものであったのであろうか。

「危機」という語は、中井において、さまざまな仕方で用いられている。文脈に応じて、他の言葉と連結され、それは異なる意味を担う[19]。「思想的危機に於ける芸術並にその動向」では芸術と思想の危機が、「模写論の美学的関連」冒頭では「意識の危機」が論じられていた。論文「Subjekt の問題」における「危機」は、「常に自らの崩壊と再建に臨んでゐる無限な危機的契機」であり、実践的主体性に関する言葉であった[20]。これに対し、「委員会の論理」では、主体性について危機という語は用いられない。これは、おそらく、用語法の変化に関連する。「委員会の論理」中篇の冒頭で、中井は「一つの制度の崩壊とその他のものによる再編制とによる危機」について論じていた。「危機」という語が制度に関して使われた「委員会の論理」では、この言葉で制度以外のものを論じることが避けられた可能性がある。いずれにせよ、重要なのは、「Subjekt の問題」で「危機」という語とともに述べられた、分裂するものとしての主体性に関する記述が、「委員会の論理」に盛りこまれた点である。「委員会の論理」の末尾では、提案、計画、報告、批判からなる回帰的過程のなかに「**主体性**の中にある自らの分裂」が想定されており、委員会は「常に二つに分裂する**デイア・ロゴス**」に関連づけられている[21]。中井における実践的主体性は、分裂ないし危機を孕むものである。そして中井における委員会は、単に決議がなされるだけの、一枚岩的な同意形成の場ではなく、常に二つに分裂する対話の場と見なされていたのである。その分裂は回帰性のなかに位置づけられた「批判」に対応することに留意したい。「先づ**提案**があり、更に**計画**と**報告**、その現実的地盤よりの**批判**、この四つの契機を経て、再び提案へと回帰する」[22]。

提案としての「委員会の論理」

実践の論理における回帰的過程には、「**主体性**の中にある自らの分裂」が見いだせる。しかし、そのような危機的契機を孕む過程がどのような意味で回帰的でありうるのであろうか。つぎに検討したいのは、この回帰性の特徴であり、また、その回帰的過程のなかに論文「委員会の論理」それ自体が位置づけられているという点である。

この**委員会の論理**として、ここに表現した**この図式**も、それが**一つの提案**として呈出さるる事で、この図式は、決して、思惟的図式として完結するのではなくして、実践そのものの中に、自ら位置づける事で、自己表現的な連続を、現実そのものの上に、持つてゐるのではあるまいか。ここにそれを一応図式化して見やう。これも一つの模型であつて、現象の検討の前に如何に耐へるかが読者によつて取上げらるべき問題である。即これも一つの**図式**ではある。しかし、やがて**投影図**と化すべき**設計図**である。この図式が自ら他のものに換はることに又**実践の論理**の重大な意味があるのである[23]。

委員会の論理は、討論―思惟、技術―生産、および実践から成立する。実践の論理は、提案、決議、委任、実行、そして報告と批判を経て新たな提案に向かう回帰的過程であった。しかし、この過程は同一の状態への回帰ではない。実行という切断が含まれ、また批判の契機を経るために、実践の論理は変化を孕んでいる。「委員会の論理は一つの回帰的でありながら、無限進展の過程」である。

中井は、委員会の論理として表現した図式を「**一つの提案**」と述べている。それによって、彼は、「委員会の論理」に関する議論を、そこで言及した「実践の論理」における**提案**として位置づけているのである。彼はまた、自らの提示した図式が「自ら他のものに換はること」に重大な意味があるとつけ加えている[24]。委員会の論理に関する図式は読者によって検討されるべきものであり、最終的には、それが「自ら他の

---

[18]中井正一「Subjekt の問題」『思想』第一六〇号（一九三五年九月）、五四頁。

[19]戦後の『美学入門』（河出書房、一九五一年）において、「危機」は多様な語と関連づけられている（「絵画」や「人間の生活」、「理性的なもの」、「美の自律性の概念」など）。戦後の「現代美学の危機と映画理論」では、タイトルが示している美学の危機以外に、個人主義文化の危機も論じられている。

[20]分裂が、分裂ならざるものを招き寄せる可能性もある。この点について、中井は多くを語っていない。とはいえ、危機的契機が「崩壊」のみならず「再建」にも関連づけられていることは留意すべきであろう。

[21]「ディア・ロゴス」は、ギリシャ語において、対話を意味する。

[22] 中井正一「委員会の論理（下）―― 一つの草稿として ――」『世界文化』第一五号（一九三六年三月）、二五頁。

[23]中井、前掲論文、二四頁。

[24]「委員会の論理」には自己言及的な記述がある。この点に関連して、一九三〇年代半ばの『哲学研究』に、田辺元の指導の下、近藤洋逸によって執筆された集合論に関する論考が掲載されたことを指摘しておく。冒頭では、「クレタ島人エピメニデスは総ての

ものに換はること」、新たな提案に転化する可能性が重視されている[25]（その場合、委員会で展開されるのは、提案、決議、委任、報告、批判という、中井の想定した論理的な言語活動に限られないはずである）。仮に、提案、決議、委任、実行という、中井の提案した手続が、肯定され、そのまま踏襲される場合、「この図式が自ら他のものに換はることに又**実践の論理**の重大な意味がある」という一節は、実践において否定される。逆に、実行を経て「委員会の論理」の図式それ自体が批判され、組みかえられる場合、そのことによって、「この図式が自ら他のものに換はる」という、「委員会の論理」の一節は妥当なものとなる[26]。この逆説的な一節を含んだ「委員会の論理」は、一九三六年、高踏的との批判もあった『世界文化』において、一月号から三月号にかけて発表される。五月号には、週刊誌『金曜日（ヴァンドルディ）』の紹介記事が掲載され[27]、七月四日付で、『京都スタヂオ通信』を改題した小新聞『土曜日』が発刊される[28]。

一九三〇年代初頭、機能概念を導入した中井は、実体としての自我という観念を解体し、社会的集団構成に溶融する身体とその機能を拡張する機械を論じていた（「機能概念の美学への寄与」）。さらに、手稿「集団美」では「相互関連する要素の機構」についても議論していた。一九三二年の「思想的危機に於ける芸術並にその動向」では、組織感における快の側面が強調され、一九三三年の「スポーツ気分の構造」では、集団における相互の共同性や集団的実存が記述された。集団における統合性を強調する議論のみならず、妨害行為を含むスポーツの二方向性ないし逆関係的否定性に関する指摘がなされることもあった[29]。一九三五年の「Subjekt の問題」では、実践的主体性における分裂が論じられた。一九三六年の「委員会の論理」では、機能概念は限定的に批判され、組織における「**主体性**の中にある自らの分裂」が論じられる。スポーツにおける逆関係的否定性が集団間の対立であったとすれば、委員会における「**主体性**の中にある自らの分裂」は集団的思考における自己関係的な否定である。一九三〇年代初頭、中井においては、自我解体の観念が、相互規定的な関連形態としての集団の概念と共存していたが、一九三六年の「委員会の論理」では、「常に二つに分裂する**デイア・ロゴス**」という、分裂を孕んだ集団的思考が素描されるのである。「委員会の論理」では、制度の危機における論理の役割も検討されていたことから、中井における論理は、既存の制度内部に限定されるのではなく、制度の崩壊と再編を媒介しうるものと思われる。「委員会の論理」の後、『土曜日』へ関与したことから、治安維持法違反の嫌疑で検挙された中井は、「われらが信念」を発表した。戦後、中井は、尾道で地方文化運動を行い、その後は国立国会図書館の副館長に就任、図書館法制定に尽力する傍ら、機能論的な図書館論を展開する。これらの一言では要約しえない中井の活動に、「委員会の論理」の痕跡が、あるいは注釈が見いだせるかもしれない。「委員会の論理」は、中井の軌跡とともに、検討さるべき〈提案〉として私たちに残されている。

注記

第一に、中井の論考からの引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。第二に、文中で西暦を表記する際、重要な場合を除いて、年号は省略した。

クレタ島人は虚言者なりと云」ったという、エピメニデスの「矛盾」が紹介され、「後記」では、ゲーデルが言及されている。近藤洋逸「集合論の所謂『矛盾』に就て―循環論法の吟味―」、『哲学研究』第二〇巻第二三一号（一九三五年六月）、九〇―一二三頁；第二三二号（一九三五年七月）、六八―九八頁。中井が『哲学研究』の編集から離れるのは一九三七年であり（「回顧十年」）、中井がこの論考を読んだ可能性はある。また、『美と集団の論理』の「思い出」で武谷三男は、『世界文化』の批評会の参加者として近藤洋逸の名前をあげている。近藤は、ペンネームを用いて『世界文化』に寄稿した人物であった。

[25]本稿で危機的契機を強調した点は、新たな提案と考える。知識人と大衆の乖離に対して、「委員会の論理」で大衆的潜勢力という言葉が用いられた点は評価できる。しかし、「委員会の論理」は、マイノリティについて雄弁ではない。マイノリティが委員会に参画し、軋轢が生じた場合、委員会の自己関係的否定や危機的契機が重要となるのではないか。

[26]先の一節が妥当なものになったとすれば、「委員会の論理」は「他のものに換は」ったといえるのであろうか。「委員会の論理」が変化しなかったなら、先の一節は妥当なものではなくなるのではないか。実践の論理に関する図式と先の一節の間に論理的階層を設定しない限り、こうした問いは、無限に続くものであろう。

[27]村岡（市村恵吾）、「週報『ヴァンドルディ』――創刊より今日まで」『世界文化』第一七号（一九三六年、五月）、五一―五五頁。

[28]『土曜日』については下記を参照。『復刻　土曜日』（三一書房、一九七四年）。平林一「『美・批評』『世界文化』と『土曜日』―知識人と庶民の抵抗―」、同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』（みすず書房、一九六八年）。伊藤俊他、『幻の「スタヂオ通信」へ』（れんが書房新社、一九七八年）。

[29]中井正一「スポーツ美の構造」（執筆年月不明）、久野収編『中井正一全集１』（美術出版社、一九八一年）、四二八頁。